

横浜開港150周年記念事業  
マスコットキャラクター「たねまる」



中田宏横浜市長

### 日本だからできる ユニバーサルデザインの本質

市長はホームページで、詩人・坂村真民のことを書いておられました。真民の詩集『朴』の「日本人が果たす宿命」などを読んでみると、真民は既に詩の中でUDについて語っていたように思いますね。

中田「真民の詩を読むと、どんなに人間が大きな力を持つとも、我々は大自然の営みの中で生きているのだということにあらためて気付かされます。UDという、ともすれば単に目の前にある構造物やインフラといった狭い意味だけに捉えられがちですが、そこから始まって、実はある意味で精神的な心の部分にも極めて大きく入り込んでくる。UDとは、そういう本質に立脚した価値観なのだと思います。

UDの考え方は、80年代後半、アメリカで提唱されたのですが、日本人がこの要件

を阻害し、逆に世界に出していける部分が多くあるように思います。

中田「そうですね。日本社会がいまのような消費経済の社会になる前は、おそらくある意味でUDの概念に最も近い営みをしていたのではないのでしょうか。例えば、ものを食べる前に、「生命を殺生していただく」という感謝を込めて「いただきます」と言う。必要な量のみを残さずに使い切る。使い切れないものについては、電気による冷凍ではなく保存する術を知っていたし、排泄物となった後は、畑に下ろし、そこからまた作物を有機的に作り出していく。このような営みは、まさにUDの一つの象徴なのだろうと思います。

いけない。

この数年、横浜で取り組んできたのがごみを減らす「G30」という取り組みです。これによって大都市の典型であった横浜のごみ処理が大きく転換しました。何でも一緒に捨てることを長らく続け、それを便利な方法として、当たり前のように処理してきたシステムを見直し、家庭ごみの分別を5分別7品目から10分別15品目に拡大するなど市民と協働して取り組みを行った結果、平成19年11月末現在で、ごみ量は平成13年度の同時期と比べて38%以上減っています。この試みは、単にごみを減らすということだけではありません。ごみを分けることで、家庭や地域の中で「これはどうちに分けたらいいのか」とコミュニケーションが行われるようになる。その結果、多くを学び、結果として必要な分だけ消費し、できるだけものを残さないようになっていく。そういうこと全体を私は「ゴミニケーション」と呼んでいます。

これが都市における人と人とのつながりの再生に向けたきっかけになり、ひいては「消費者責任」の涵養にまでつながっていただけると思うています。消費者責任とは、広く考えれば、消費者自身が本当は何を望んでいるのかという本質的なものを生産者や販売者側に伝えていくことまで含まれています。横浜市民360万人は今、その説得力を持ち始めてい

ると思います。

### 「創造的改革」と、 公共を高める「市民力」

これらの根底にあるのが、市長のその基本方針である「創造的改革」と、それを支える「市民力」ですね。

中田「ごみを減らすやり方は、実は他にもいろいろあるのです。市民がやらなくても行政側が下請け工場をつくって、分別、リサイクル処理をすることもあります。しかし、その道は絶対に選択してはならない。それだと人は成長していかないからです。「創造的改革」の基本的な考え方は、そこなのです。「このまま行ったらどうにもならないから変える」というのが「余儀なき改革」だとすると、「創造的改革」は、「こうしたほうが我々にとって実り多いからやる」ということです。ごみの問題も、「もったいない」が社会にとって有益であるという考え方に立ち、消費や自らの生活そのものを長期的に考え続けていくことまで含めると、これは「やったほうがいい」という「創造的改革」の一環となるのです。

それを実行するのが、「市民力」で、公共の高まりはまさにそこにかかっています。私は「公共サービス行政サービスではない」と常々言っています。公共を高めることは、行政だけではできません。市民、企業、NPO、自治体、町内会の力が結集し

## 「創造的改革」と「市民力」が 人と人との つながりを再生する



横浜港を臨む山下公園は人々の憩いの場



「G30」の啓発活動として、各収集事務所や区役所と連携して出前教室を実施



集合住宅、とくにコンテナを使用している地域で、自治会と協した取り残し啓発を実施



横浜市内では人通り多いところに喫煙禁止地区を設けている。一人ひとりがマナーを意識することで公共性を高めるのも「市民力」の一環

それが経済社会になって寸断され、そうした社会のつながりというものが分かってしまいましたが、かつてなら行政課題ではなかったものが、現在は行政課題になったり行政の仕事になったりしています。例えば街の美化を考えた時、かつては地域の人たちが自分の軒先から周りで掃いて清めていた。公園の清掃でも、誰からともなく近隣の人たちによって行われていました。またその結果として、共有スペースが無残に汚されることも少ないという良い循環がありました。

介護の問題も同様です。江戸時代にしろ明治時代にしろ、介護が必要な人はたくさんいたはずで、当時の行政がそれを賄っていたのかと思ったら、そうではなかった。多くは、家族、隣近所、あるいは親戚も含めた中で行われていたし、そこには単に労力ということ以上に人と人とのつながりが生まれてきていたわけです。その中で子供たちは、人間は歳を取ると階段を一步一歩上がっていくことが実に変なのだということを目の当たりにし、最期の息を引き取るところまで見守りながら成長していったわけです。

ところが現在はそういうことがありません。だからといって「昔のようにしましよ」といっても無理です。ですから、行政はその「きっかけ」を作っていかなければ

なければならない、そのような力を総称して、私は「市民力」と呼んでいるのです。

あらたな日本の先駆けとして  
昨年9月には「横浜ライフデザインフェア2007」が開催されました。あれはどういう主旨だったのでしょうか。

中田「団塊の世代が大量退職期を迎える、基本的には地域の中で過ごす時間が増えてきます。それならば、楽しく過ごしていただきたい。もつと言えば、公共を高めるところに力を貸してもらえたらありがたい。だから簡単に言えば、趣味からボランティアまで含めて、いろいろなメニューを見てもらおうというのが「ライフデザインフェア」の主旨です。団塊の世代に限らず、同様の問題はありますから、これからも続けていきたいと思っています。

2009年で、横浜は開港150周年という大きな節目を迎えます。横浜の歴史は、開港の歴史ですし、日本の近代化の歴史そのものでもあります。この機会に、文化や社会システムなど私たちの現実の暮らしにつながることは、ほとんどが横浜から入って学ばれ、日本中に広がっていったという「日本の先駆け」としての横浜の歴史を知り、そこに暮らすことに心地よさや誇りを持てるようになればいいと思っています。



#### 公害問題の逆境を力に変えた川崎市

かつては公害問題に苦しんできた川崎市が、大きく変容しています。

阿部川崎は、1970年代前半、石油や鉄鋼関係の企業が全盛期を迎えたところに公害問題に直面し、ドルショック後の円高にもなる企業の海外移転なども重なり、産業の空洞化が進みました。川崎駅前や武蔵小杉駅周辺、臨海部を中心に残っていた企業跡地に大手の企業が研究開発センターを建設し、マンション開発が始まりました。その結果、今時、珍しいことなのですが川崎市は研究開発センターなどで働く最先端の科学技術をもつた人々など、毎年2万人程度、人口が増えています。

川崎市内には新産業の創造を目的としたサイエンスパークが3カ所あります。た楽団をすべて集めて「フェスタ・サマーミュージア」を開催して3年目になります。美術分野では、岡本太郎さんが母かの子の出身地の川崎で幼少期を過ごした縁で、作品のほとんどが寄贈されてできた市営の岡本太郎美術館があります。

向ヶ丘遊園跡地には、ドラえもんなどで有名な藤子・F・不二雄さんのミュージアムもできます。等々力の市民ミュージアムにはヨーロッパのマンガ系統のコレクションがありますし、読売漫画大賞の作品はみんな、川崎市の市民ミュージアムに寄贈していただいています。スポーツではサッカーの川崎フロンターレががんばっていますし、アメリカンフットボールのワールドカップも日本で初めて開催しました。

#### 企業力、技術力を活かした川崎発UD

川崎では、ユニバーサルデザイン(UD)に関係した取り組みも盛んです。

阿部UDは街全体の構造を変えていくようなもので、最初の設計さえよければいつまでも機能的に使えます。UDの視点で見れば、福祉が明るくとらえられ、その事業はまさしく産業になりますから、世界中で高齢化が進めば、先進国でのモノづくりの基本軸になるだろうと思っています。



阿部孝夫市長

が、そのなかにはTHINK(テクノハブイノベーション川崎)というめざらしい民間のサイエンスパークもあります。東京や羽田へ行く地の利の良さもあって、大手企業の研究開発機能の集積が進んでいます。臨海部では「エコ・コンビナート構想」として、地域単位で最も廃棄物が少ない省エネ型の工場地帯づくりが進んでいます。

川崎には公害を乗り越えた最先端の公害対策の技術を有する企業がたくさんあります。川崎では福祉産業の振興ビジョンを作成中であり、このなかでかわさき基準(KIS・カワサキ・イノベーション・スタンダード)という、本人の自立を基本とした福祉機器の基準づくりをしています。これは福祉産業の機械、器具類などについて専門家に審査してもらい、欧米人の体型ではなく日本人を含むアジア系の人たちに合うようなモデルの認証を行うことを含め、使いやすい合理的な福祉機器を創出しようとするもので、羽田空港の国際化にもらみ、アジアを福祉機器の大きな市場としてとらえています。

市政のスローガンに掲げられている「サステナビリティ」には、自然環境と社会環境、さらに人間環境の持続も含まれているようですね。グッドサイクルもユニークな取り組みです。

阿部川崎の一番の強みは産業で、工業系統で日本初のものがたくさんあります。機械ではできない精密な手作業ができる技術者が、川崎にはまだまだたくさんいますから、その「技」を次世代に継承する「川崎マイスター」という認定制度を設けたり、振興活動を支援しています。グッドサイクルは、民間などの各主体の密接な連携でまち全体を活性化する方法です。新百合ヶ丘の場合、芸術のまちづくりをPRしています。昭和音楽大学

## 先端産業と文化が花開く元気都市



ミューザ川崎シンフォニーホールは中央ステージを約2000の観客席が螺旋状に360度取り囲むワインヤード形式のホールをもつ。

りますから、経済発展にもなる公害に苦しんでいるアジア諸国の持続的発展のモデルになると思います。川崎市はアジア起業家村といって、アジアの研究者、ベンチャー企業の方々が、川崎で研究開発、起業し、あるいは川崎に企業進出するのを積極的に支援する場を提供しており、また、UNEP(国連環境計画)と提携して、アジアへの環境技術移転も積極的に進めています。

#### 多様な魅力の織り成すまちづくり

一方で、川崎市には多摩川に代表される豊かな自然もありますし、文化やスポーツ面でも活発な動きがありますね。

阿部音楽では2004年の市制80周年に「ミューザ川崎シンフォニーホール」をオープンし、夏に首都圏の名前の通った移転で、オペラができるホールができましたが、日本映画学校もありますから、若い人たちが集まって映像と演劇関係の両方のモノづくりができるよう、市がアートセンターをつくりました。しんゆり山手を開発した不動産会社や小田急、地域の金融機関、商店街などに入ってもらい、PR委員会を大々的に立ち上げたところ、市から資料さえ提供すればみんなが宣伝してくれます。そうすると、土地やマンションを買って引っ越して来る人たちはおのずと芸術文化に造詣のある人たちとなり、何年かすると自動的にその人たちが支える側に回ってくる。するとまた自動的に人材が集まってくる。こうしたグッドサイクルができるというわけです。

そういうことから、大きな計画も具体的になってくるわけですね。今日はありがとうございました。



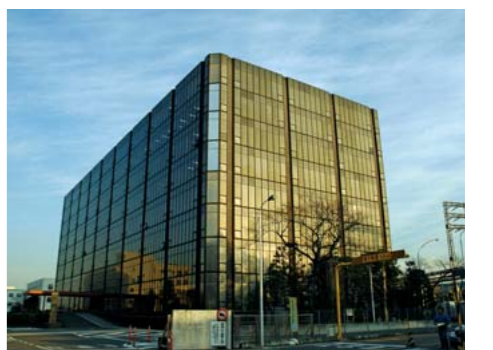
故岡本太郎から作品の寄贈を受け、生田緑地に建設された岡本太郎美術館



川崎フロンターレはJリーグの理念にもとづき、地域社会との共生をテーマに掲げている



川崎市には工業系統で日本初のものがたくさんある。コロムビアミュージックエンタテインメント株式会社(旧日本コロムビア株式会社)による国産第1号1910年の蓄音器もそのひとつ



THINKは臨海部に位置する民間のサイエンスパーク。新事業の創出支援や産学連携共同研究等に取り組む